

# かぐらおか

第 83 号

平成 7 年 5 月 16 日

編集 旭川医科大学  
 厚生補導委員会  
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は初代学長 山田守英氏)



(写真撮影 動物実験施設 稲場 茂)

春 風

第23回入学式式辞……………学 長… 2	平成 6 年度学士学位記授与式……………11
第23期生を迎えて……………谷本 光穂… 3	平成 7 年度入学式……………11
新入生記念写真……………4	新入生研修実施される……………11
平成 7 年度入学者名簿…………… 5	平成 7 年度の主な行事……………11
新入生を迎えて……………本間 大… 6	平成 7 年度運営組織……………11
新歓合宿を終えて……………豊島 優人… 6	平成 7 年度大学院入学者名簿……………12
弓道部創立20周年を過ぎて……………水上 創… 7	平成 6 年度学位記受領者名簿……………12
スキー部今昔……………中出 幸臣… 7	教官の異動……………13
写真部……………鈴木 英章… 8	第37回東医体スキー部門男女アベック 総合優勝、東医体夏季、冬季総合優勝……………13
茶道部……………竹内 茂… 8	窓 外……………廣川 博之…14
研究室紹介……………内科学第二講座… 9	編集後記……………坂本 尚志…14
研究室紹介……………解剖学第一講座…10	
大学祭について……………後藤 順 ……10	



## 第23回入学式式辞

学長 清水 哲也

皆さん、入学おめでとう。

希望に満ちあふれる、一人、一人の輝くばかりの表情を見るにつけ、「入試」という難関を切り抜けて、見事、栄冠をかちとられた皆さんへ、あらためて、心からの祝福を贈ります。

そしてまた、優秀な新入生の皆さんを、今日まで、手塩にかけて、はぐくみ育ててこられたご父兄の皆様へ敬意と祝意を捧げたいと思います。

新入生の皆さんが、本日、只今から、その第一歩を踏み出そうとしている医学の道は、決して単なる診療技術そのものを意味するものではありません。

診断技術や治療手技といった技術的なことを学ぶ前に「医の心」、あるいは「医の原点」に深く思いを馳せて下さい。今日、「社会」が皆さんに求めている「期待される医師像」というものが、如何なるものかを、今日という日に是非とも真剣に考えてほしいのです。

そのためには幅広い教養を身につけ、豊かな人間性、自主的な判断力を常に養い、より高度な社会性を身につける必要があります。「初心忘るべからず」です。生涯を通して学習し、「未知なるもの」へ敢然として挑戦する勇気を持って下さい。

そしてまた、ただ単に、専門分野のみにとどまらず、全般にわたる広い視野と高い見識を保持して下さい。

人間性あふれる豊かな感性と「病める人達」への限りない暖かさに満ち満ちた医学生であってほしいのです。

さらには生命倫理に対する深い畏敬の念を片時も忘れず、常に病める人たちの立場に立つこと、つまり、人の痛みをわが痛みととらえることのできる医療者であるためには、単に医学のみでなく、その周辺領域に係る知識と深い教養を是非とも学びとって頂きたい。

今こそ、私ども医療にたずさわる者は、フーフエランドの「医戒」の冒頭の言葉の重みを反芻する必要があります。

「病んでいる人を見て、これを救おうと願う情念、このことこそが、医学の原点であり、医師は他人を救うためにこの世に生をえているのであって、自分

一人のためではない、これこそが、医師という職業の本質である」と説いているのであります。

また、今や医学は、そして医療は、激動する社会事象から隔絶された「病院」のなかにのみ孤立して存在する時代ではなくなりつつあります。したがって6年間という限られた期間に幅広い教養と医学の専門的学習を両立させるためには、必ずしも一般教育、専門課程という形式的な医分にとらわれることなく、全体を一貫とした観点から考える必要があります。

本学では、その教育効果を期待して、開学当初より6年一貫教育という思想に立脚したカリキュラムを実施しております。

したがって、一般教育という呼び方も基礎教育系という名称に変えました。この基礎教育系は、共通基礎科目、専門への基礎科目、医学との学際的学科目、医学以外の「学科目の概論」の4分野に配置されていますが、本学で実施されている、いわゆる「統合医学型」の利点は、とくに医学教育の効率化と同時に学習の効率化を高める効果があります。

卒業生の数も今春の第17回生で1,818名に達し、本学の卒業生の中から、既に3名の国立大学の教授の誕生をみ、そのうち2名の卒業生は母校の教授として活躍中です。

数学や物理・化学といった基礎科目は、医学の専門課程に入る前のミニマムエッセンシャルでもあります。高度の科学技術が駆使されている「医学の最前線」で、これらの基礎科目を身につけていない学生は、将来「専門課程」の履修に際して大きな困難に直面することになります。また同時に国際的な場で活躍するためには、語学力が何にもまして要求されます。

おわりに「部活」などの課外活動にも積極的に参加して強靱な肉体と強い意志力の涵養にも努めて下さい。本学のキャンパスをとりまく雄大な自然が声なき声援を送ってくれることでありましょう。

希望に満ちあふれた諸君の前途に、再度、祝福を送って、式辞と致します。



## 第23期生を迎えて

第1学年担当 谷本光穂  
(物理学教授)

新入生諸君、入学おめでとうございます。父兄の皆様もさぞかしお喜びのことと思います。苦しかった受験生活から解放され、まさに我が世の春を謳歌していることでしょう。いよいよ楽しくもあり苦しくもある6年間の学生生活が始まりました。そして生涯を通して学習し続けることになる医学の道に第一歩を踏み出しました。諸君にとっては、この記念すべき門出において医学に対する新たな志をしっかりと持つことが肝心です。

既にご存知のように本学では各学年にそれぞれ1名の教官が学年担当として置かれ、諸君の学業や大学生活に関する指導助言を行い相互理解を深める役目を果たすことになっています。諸君の最初の2年間は私が学年担当としてお世話することになります。

さて、最初の2年間においては数学、物理学、化学、生物学といった自然科学の基礎を学び自然科学的思考力を養うと共に、人文社会系科目を通して人間および人間社会の理解を深めることが求められます。このことは、将来医師あるいは医学者となる諸君にとって大変重要なことです。ところで、大学の授業は高校の授業と随分違ってきます。受け身の姿勢で受講していてもさっぱり楽しくありません。授業の中から疑問を見出し友人と議論したり、先生に質問したりあるいは図書館で調べたりすること、つまり自分から積極的に知的好奇心を駆り立て学習することが大切です。質問があれば各科目担当の教授室のドアをノックしなさい。親切に相談にのってくださる筈です。そして、先生方の個性豊かな人間性に触れることもできるでしょう。

諸君はつい先程まで苦しい受験戦争の中で孤独な戦いをしてきました。しかし、いつまでもその生活を引きずってはいけません。共同社会としての対人関係に関心を向けることが肝心です。豊かな人間性を培うために、そして青春を意義あるものにするためにも良き友人をつくるのが大切です。そのためには、クラブ活動やボランティア活動に積極的に参加することを勧めます。このような活動を通して得られる交友関係(交遊関係ではありません)ほど素晴らしいものではありません。一生の財産になるでしょう。

「学生生活のしおり」の中の学年歴を参考に年間

の休業週数を数えてごらんください。毎週土・日が休業であること、水曜日の午後に授業がないことを合わせると実に半年以上の自由な時間があることに気付くはずですが。大学生活が有意義なものになるか否かは、この貴重なしかし余りある自由時間の使い方によって決まるといっても過言ではないのです。

一方、学業や課外活動などこれからの大学生活を快適に過ぎていくためには自己の健康管理が一番大切です。諸君の大半は初めて親元を離れ、下宿やアパート生活を始めていることでしょう。高校時代までの健康管理は親まかせでよかったのですが、これからは自分でしなければなりません。医師を目指す医学生として特にこの点を自覚して下さい。また、体調に不調(怪我や精神不調も含めて)を感じたら、速やかに保健管理センターを訪ねることです。本学附属病院の医師が親切に対応して下さい。自己の健康管理をしっかり行い心身共に健康な学生生活をおくってもらいたいものです。

ところで、受験から解放された諸君の中には早く車の免許を取りドライブを楽しみたいと思っている人が大勢いると思います。しかし、本学では交通事故や駐車場の管理運営上の問題から低学年の自動車通学は禁止しています。車を運転すれば事故はつきものです。将来人の命を救う立場になる医学生が、人を傷つけたり、命を奪うようなことがあったらとんでもないことです。交通事故などで罰金以上の刑を受けた者は原則として医師国家試験の受験資格を失います。ただし、不幸にして事故を起こしてしまった時は速やかに学年担当の私へ報告することです。改悛の情が顕著である場合に限り学長に「申立書」を書いて戴くことにより受験することができる道が残されています。なにはともあれ人命を救い社会の幸せに貢献すべき医師となる諸君の良識ある行動を心より願うのみです。以上23期生を迎えるにあたり学年担当として大学生活を始めるにあたっての心構えの一端を述べました。まだまだ話をしたいことはありますが折りに触れ話すことにいたします。これからの長い6年間、様々な苦難を乗り越え一段と逞しくなり、若き医師、医学研究者として元気に巣立っていられることを心より期待しております。





## 新入生を迎えて

第6学年 本間 大

大雪の山々の頂きは、まだまだ真白な雪で覆われておりますが、ようやくこの北の地“旭川”にも、“春のにおい”が薫るようになってまいりました。そして今年も、新入生の方々が我大学に入学されました。第23期生の皆様、御入学おめでとうでございます。

今、皆様の心の中は、この季節同様、そして5年前の我々同様に、“希望”に満ちあふれ、また、これから始まる学生生活というものに思いをはせられていることと思います。そして、実際に始まった数週間の学生生活にいろいろなことを感じられているのではないのでしょうか。もしかすると、入学早々、勉強が大変だとか、実習が大変だとか、試験が大変だとかという話ばかりきかされ、“希望”の中にも一抹の不安を感じているのかもしれませんが、確かに、一つ一つのことは大変なことかもしれませんが、けれども、そうしたことにとらわれて、後々振り返ったときに実感を得られない6年間というものは寂しいものです。何か一つでも本当にうちこめるものを求めることができれば、それは素晴らしいことです。もちろん、それが何であろうと構わないでしょうが何かサークルにでも入って、皆と一生懸命にやるのもいいでしょう。そしてその中で、いろいろなことを考え、いろいろなことを学ぶということは大変重要なことです。また、天気の良い日などは、ごくたまには午後からカゼ(?)でもひいて、北海道の自然を楽しんだり、街を散歩してみるなんてことがあってもいいかもしれません。そして夜は、気の合う仲間同士集まって、どうでもよい話をあてもない、こうでもない話し合うのもいいでしょうし、様々な人々と交流を深めるというのもいいでしょう。

大学での6年間というものは、短いようで、長いようで、振り返ると案外短かったりするものです。この6年間は、いろいろな方面の勉強ができる期間でもあります。手の中にある“時間”というものを皆さんが有効に利用され、実りのある、充実した6年間を過ごされることを心から期待しています。

## 新歓合宿を終えて

新入生歓迎実行委員会委員長 豊島 優人

今年も恒例の新歓合宿を97名の新入生の参加をもって無事終えることができました。3月の初めに合格者に送るパンフレット“旭医の極意”の印刷と製本を行い、それと平行して新歓合宿における新歓委員の役割、スケジュールを確認し、4月8日の新歓合宿当日を迎えました。まず、クラブ紹介が行われ、各クラブのアイデアあふれる紹介は、旭川医科大学を象徴する活発なものでした。それから、安井晃一氏の講演会や新入生の学内めぐり、クラブの出店が行われました。クラブの出店は昨年セミナー室で行われたが、今年は体育館で行われました。新入生にとってこれから大学生活をおくるうえで、クラブ活動は、勉強はもちろん言うまでもなく、とても重要な役割をはたします。この自由に行き来できる体育館でのクラブの出店には多くの新入生が足を運んでいました。

高砂ニュー温泉では、チューターやクラブの代表者との語り、そして新入生同士の語りへと続けました。私も去年、ここで多くの人々と出会い朝まで語り合いました。そしてそのことは今でも大切な思い出として心の中にあります。

今、この1年間を振り返ってみると、たくさんの人々に励まされて生活してきたように思われます。この新入生歓迎の仕事においても、新歓委員以外の多くのクラスメイトが手伝ってくれました。そして、一つ仕事が終わって帰る時、「また何かやることがあったら呼んでよ。」と言ってくれました。また、ある先生は「新歓の仕事がんばっているね。」と励ましの言葉をかけてくださいました。そして、また、パンフレットを仕上げる際に田辺さんに大変お世話になりました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。初めは無理だとあきらめていたこともたくさんの人々の温かい心遣いで実現することができました。本当に感謝です。

## 弓道部創立20周年を過ぎて

20期 弓道参段 副将 水上 創

本年度も旭川医大は多くの新生を迎え、その内の幾人かは我々弓道部の門戸を叩いた。23期生は現役であれば昭和51年生まれ。弓道部の創設は彼らが生まれる2年前、つまり開学半年を経た昭和49年であり、本学2期生近藤啓史先生が萬上義守教士六段の許を訪れ、弓道部師範となって頂くことを御願ひし、また、担任であった黒島辰汎第一生理学教授に顧問を引き受けて頂いたことに始まる。それ以来部員を集め、弓道具を揃え、練習場所を確保して旭川医大の22年の歴史と共に弓道部は活動を続けてきた。

特に練習場所は旧国鉄弓道場（旭川駅構内）露天仮設弓道場（現リハビリテーション病院）旧市営弓道場（常盤公園内）と変わり、昭和56年4月、師範萬上先生、近藤先生をはじめ諸先生方の御尽力により、創部7年目でようやく大学敷地内に専用の道場を持つに至った。昭和61年、山田守英初代学長より「玄奥館（げんおうかん）」の名を頂き、部員の弓技鍛練、弓道精神の修養、会得の場となっている。

また、昭和50年の第22回全道学生弓道選手権大会

への個人参加を始めとし、道内の諸大会、東医体等への参加が始まった。特に昭和59年の第27回東医体では団体優勝（この時全医体では準優勝）平成4、5年の第35、36回東医体では連続準優勝（全医体ではそれぞれ4位、3位）。また個人でも上位入賞者、射技優秀賞等も数多く受賞し、さらに高段位保持者も多数輩出している。

弓道部は最近では30人あまりの部員を擁する大所帯となり、多くのOBを輩出した道場もやや手狭な印象がある。また、先年師範萬上先生が体調を崩され、旭川医大病院に入院された際、内科、外科、皮膚科等に多数のOBが居り、師範の御世話をする機会があって、20余年を経て弓道部の輪の広がりを変えて知ることとなった。

現在弓道部の活動、運営は順調であり、我々現役部員は弓道を楽しむ余裕すらある。これも偏に弓道部を創り、育てて下さった先輩方の御苦勞によるものであり、深く感謝する次第である。そして諸先輩方の血と汗（と酒？）の臭いのする道場で、正にその名の示す通り「期道の玄奥を研める」ように部員一同より一層練習に励み、弓道部発展のために精進してゆきたい。

## スキー部今昔

第5学年 中出 幸臣

今でこそ旭川医大の中で強い部の一つとなったスキー部も、創部当初は様々な苦勞が有ったそうである。昭和48年、1期生の細川、牧野両先生が東先生のもとに顧問をお願いしたときからスキー部は始まった。アルペンのポール練習では数が少ないために半分に折りながら滑ったり、ランナーでは岩原先生が入部してから本格的に始まったそうである。東医体においても結果は思わしいものとはならず、梅藤先生がアルペンスキーで8キロを走ったという逸話が残っている。

そして年月がたつにつれて、徐々に部員も増えていき第25回東医体で初優勝を成し遂げる。それを契機に我がスキー部5連勝の栄光の時代となる。1年目でいきなり東医体で優勝した石原先生をはじめ、鉄人石井先生、スラロマーの木の内先生、純レーサーの横山先生など凄い先生がいた時代だった。この5連勝の後4年間優勝からとうざかったが、このころ活躍された先生として穴倉先生がおられる。彼

は1年間休学して単身欧州へスキーの武者修行にいかれた凄い人であった。

再び優勝したのは彼が引退してからであったが、それからはみんなのちからで勝つとゆう雰囲気になっていった。実際今年優勝した結果をみても誰が勝ってもおかしくない感じであった。

女子部のほうも以前5連覇をのがしているのを反省してか、今年はどうとう5連覇を達成した。これはとても凄い事であり、飛世先生をはじめ、2年連続2冠の由良先輩による力が大きかった。

このようなスキー部の活躍を多く述べてきましたが、私達を支えてくださっていただいているOBの先生方を忘れる訳にはいきません。とかく金の掛かるスキー部の活動にかなりバックアップをしていたおり現役部員一同心より感謝しています。またもっとも幸いなことはアルペン、ランナーに安藤、後藤両コーチがおられることです。彼らは部員1人1人に適切な指示を与えてくれ心強い限りです。

最後にスキー部に入部すると贈られる言葉をお伝えします。『きみたちは先見の明がある。』

## 写 真 部

### 第5学年 鈴木 英章

写真部員は大学祭が近くなると真っ暗やみで何時間も過ごします。それは、まるで世界中に自分一人だけしかいないような不思議な気分させます。真夏の深夜、美瑛にドライブに行き、ヘッドライトを消して夜空を眺める時、ふと、暗室で写真を焼いているような錯覚におそわれる事があります。

不思議と雨でもないのに大学祭の当日の朝、濡れたパネルが貼ってある事があり、たいがい近くのソファーには熟睡している部員の姿があります。

今年も、そんな季節になりました。今まで、数々の先輩方が数々の武勇伝を残しましたが、それは文科系の部活のそれで、決して運動部のそれとは比べ物になりません。それでも、大工作業で作り上げたパネルの後ろにかかれた先輩の名前を見て、同じ方が今頃、メスを持っているかと思うとついで、部員一同うなってしまうたり、写真部の暗室

に人知れず、後輩の為にビールを差し入れてくれる先輩、ある年の部室の大掃除に束になった先輩の写真を発見して誰のかわかる人だけ配っていたら、昔の彼女の写真が入っていたらしく、家に持ち帰って見ていたら、奥さんに指摘されて怒られた方とか、文科系の部活らしく、微笑ましいものばかりです。しかし、最近は白黒写真の人もいまひとつで、新入部員は年々、少なくなる傾向にあります。

ワープロですらカラーの時代ですからと、思ってみても、白黒の良さは譲りがたいものがあります。

今までは、OB会も十分ではなく、先輩方に寂しい思いをさせてしまい大変、申し訳ありません。今年、OB会を準備させて頂こうと思っていますので、昔、写真部で活躍した記憶がありましたら、是非、ご一報下さい。今年、鈴木が弱輩ながら部長を務めさせていただきますのでよろしくお願ひします。OB会の方は鈴木(65-9392)まで、ご連絡ください。

## 茶 道 部

### 第4学年 竹内 茂

「和室」という部屋が大学内にあることをご存じですか。保健管理センターの隣にあるその部屋で、私たち茶道部は毎週火曜日午後5時から活動を行っています。現在、部員は24名です。指導の方は、学外から裏千家の先生をお呼びして行われています。普段の練習内容としては、先生の御指導に従ってお点前(お茶をたてること)を習うということが主なもので、また、定例行事として1月には初釜、11月には炉開き(茶道部内での小さなパーティーのようなもの)を行っています。

茶道部の創部は1975年(昭和50年)5月に長谷部千登美先生によって行われました。当時は十数人の部員でスタートし、部を盛り上げ、そして現在に至っています。顧問の先生には、吉田聖子先生、原田一典先生、そして現在、坂本尚志先生に就任していただいています。御指導の方は、裏千家淡交会旭川支部所属の長岡英子先生、堤寿子先生、小嶋博子先生になさっていただけてきました。堤先生には、現

在もお願いしています。創部当時は保健管理センターがまだなく、そのため和室には今よりたくさん窓があり、見晴らしももっと良いものでした。

茶道部では、日頃の練習の成果を発表する場でもある学祭には第2回目から参加してきました。学祭ではお点前(お茶をたてること)を披露するとともに、みなさんにお茶に慣れ親しんでもらおう、という意図で行っています。

また、学祭以外の活動にも積極的に参加してきました。例えば、旭川市内で年に数回行われているお茶会(チャリティー茶会、霜月茶会など)へ参加しています。また、秋には和寒町にある片栗庵(町立の立派な茶室です。)で茶事を行ったりしています。平成4年には裏千家淡交会北海道大会(発表会のようなもので、お家元も参加された大会です。)が旭川で開催され、その際、学校茶道の代表としてお点前をしたこともあります。

最後に、一般的に茶道は堅苦しいというイメージがありますがそんなことはありません。旭医茶道部は和やかな雰囲気です。

茶道部をよろしくお願ひいたします。



## 研究室紹介

### ■ 内科学第二講座 ■

中村 公英

第二内科学講座は昭和49年、石井兼央初代教授により開講され、昭和63年8月に牧野勲教授が就任し現在に至っています。教室員は牧野教授の就任後の入局者が半数以上を占め、若い力による教室の活性化が、診療、研究両面において実を結びつつある現況です。牧野教授の基本方針は、各自が内科疾患に幅広く精通すると同時に、卓越した専門領域をもった内科医となることを第一としており、また研究面においては、臨床に密接したオリジナルな研究で、結果を臨床の場にフィードバックできるものを目指しています。現在までの研究体制は診療との兼ね合いから、肝臓、糖尿病、膵臓、代謝（膠原病・内分泌・神経）、甲状腺グループの5グループでしたが、今年度からは各研究テーマ別に細分化するとともに、グループ間の連携をはかり研究レベルの向上を目指しています。

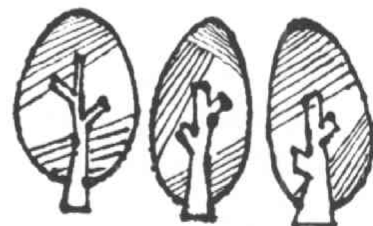
（肝免疫グループ）は中村講師を中心に胆汁酸代謝を研究してきましたが、最近自己免疫性肝炎におけるウルソデオキシコール酸の有効性を見だし、その作用機序を胆汁酸の免疫調節面から追及しています。（肝生理グループ）は米田助手の指導のもとに中枢性神経ペプチドによる肝血流増加作用、肝細胞増殖効果、肝障害抑制効果を明らかにし、作用機構について研究を行なっています。（脂質グループ）は衛藤助教を中心に脂質代謝異常症におけるアポ蛋白E遺伝子について、特に糖尿病性腎症、Ⅲ型高脂血症、アルツハイマー病における本遺伝子の関与について研究しています。（インスリングループ）は岩島助手を中心に糖尿病の成因における膵B細胞のインスリン分泌機構、特に電位依存性カルシウムチャンネルについての分子生物学的研究を、（糖尿病合併症グループ）は伊藤助手が米国留学中ですので、宮本医員が糖尿病性神経症としての消化管運動異常について研究しています。（膵グループ）は山寺助手を軸に慢性膵炎における膵石形成機構について、特に膵石抑制蛋白（PSP）や zymogen 顆粒膜に存在する GP2 蛋白の動態について自ら、作成した抗体を用いてオリジナリティの高い研究を行なっ

ています。また、アミラーゼインヒビターを研究した小池助手が米国から帰国しました。（代謝グループ）は田中講師、平野助手を中心に分子生物学的手法を用いて、副腎皮質ステロイドの作用機構の研究、ストレスと細胞内レドックス機構の解析、慢性関節リウマチの病態解明と新しい治療法の開発、胆汁酸の免疫調節機構に関する MHC 遺伝子や転写調節遺伝子 NF- $\kappa$ B の発現機構の解明などの幅広い研究を国内外の研究施設と共同で行なっております。（甲状腺グループ）は滝山医員を中心にブタ甲状腺培養細胞を用いてヨードの取り込み機構における各種のホルモンや胆汁酸の影響を研究しております。これらの研究成果を反映して、第二内科への文部省科学研究費の下附は年々増加し（平成6年度は6研究課題）、また教室は厚生省特定疾患調査研究班（平成7年度は3研究班）での実績が高く評価されております。

診療面では肝臓、糖尿病、膵・消化器、内分泌、神経、膠原病の専門外来をそれぞれの研究グループの医師が行ない、入院診療は研究グループ別病棟診療体制をとり、より専門的な高度の大学病院にふさわしい診療内容の充実をはかっています。

一方、医局のレクリエーションとしては春は花見、夏は海水浴、キャンプ、秋は観楓会、冬はスキーを病棟看護婦とともに行ない、日頃のストレスの発散とよりいっそうの親睦をはかっています。このように第二内科では、牧野教授のもとで教室員一人一人が切磋琢磨し研究、診療レベルの向上に勤めています。

（内科学第二講座 講師）



## 研究室紹介

### ■ 解剖学第一講座 ■ 大森 行雄

解剖学第一講座では、系統解剖の教育を担当している。スタッフは小野一幸教授、佐藤洋一助教授、石川一志助手、大森行雄助手、佐々木孝志技官、羽沢和美技官の6人である。毎年暖かくなる4月初旬からは学生の解剖実習が始まり、6月末まで実習が続く。例年学生4人に対して解剖体1体で実習を行ってきたが、本年度は学生2人に1体という極めて恵まれた状況で解剖実習が行われている。研究では、佐藤助教授はこれまでに外分泌細胞（蛋白や脂質分泌）における分泌刺激後の形態変化を形態計測を用いて解析し、その分泌機構について研究を行ってきた。また最近では岡崎国立共同研究機構生理学研究所で外分泌細胞における細胞内カルシウムの変動とその形態変化について研究し次々に国際的な専門誌に発表している。石川助手はここ数年、腸管粘膜筋板の機能を明らかにしようと種々の神経伝達物質の存在とその効果について生理学研究所で研究を行っている。その研究姿勢はまさに「石橋を叩いて渡る」如しで我々のよき模範となっている。大森助手は各

種内分泌細胞におけるホルモンや神経伝達物質の細胞内局在とその機能的関連性について免疫組織化学を用いて研究を進めている。扱っているものが抗血清だけに「水物的な」ところがあり、染まったり染まらなかったりで、一喜一憂の波に翻弄されている。このように各人研究対象はそれぞれ異っているが、「細胞・組織の形態と機能の関連性」について明らかにしようという点で一致している。また小野教授の“交流を大切にする”という方針から、他の講座からも多くの方が第一解剖に来られ、灌流固定法、免疫染色法、組織切片の作製法、写真撮影などの技術を修得されている。このような他の講座の方との交流が私どもにとっても良い刺激となっている感がある。平成5年にはタンザニアから Dr. アイノリー・ピーター・ゲサセが留学生として講座に入室し、現在大学院生として精力的に研究を行っている。長期にわたる解剖学実習や研究がスムーズに行えるのもひとえに技官の佐々木さんや羽沢君のおかげである。教室員一同深く感謝している。

(解剖学第一講座 助手)

## 大学祭について

### 第5学年 後藤 順一

最近では旭川らしい、快晴の気持ちのいい日が多くなり、夏の兆しさを感じられます。スカートと晴れた日などには講義など置いておいてどこかにいってみようかな——などという良くない考えが、思わず頭をよぎってしまうのは私だけでしょうか。

さて、昨年までの学祭を振り返ってみると、全体として学祭に対する魅力というものが薄れてきているように感じます。さらに感じることは、その原因は、私達学生、一人一人の無責任にあったのではないかと、ということです。ことわっておきますが、かくいう私もその無責任の学生の一人でした。学祭の面倒くさい仕事を実行委員に押し付け自分達は自分達の営利だけを追求する。予算はもらうが実行委員の手伝いをするわけでもない。当然実行委員の数は減り必然、規模は縮小する。そんな学祭が楽しくなるわけがありません。

そこでこんないい季節。魅力のない事になど参加せず、自分の時間を持ちたいと思うのは至極当然の

事と思います。只、そこで学祭を面白くないものとして、そこから目を外らすのか、それとも面白くないのならそれを魅力あるものに変えていこうとするのか、そこに大きな隔りがあると思います。

「それならちょっとやってみるか！」とできたのが今回の学祭実行委員です。実行委員長の私ですら、一度も実行委員の仕事をやったことがなく、とにかくなんとかここまでやってきたという感じです。今まで多くの友人や先生方に助けられ実感として思うことは、皆んなの助けと、やる気さえあれば、誰でも学祭をやることは出来る、ということです。

さて今年も、来る6月1日から4日まで大学祭が行われます。今回の学祭では、Beginのコンサート（1日）、バンドコンテスト（3日）、花火大会（3日）、講演会（4日）、早食い大会、医学展（8団体の予定）、サークル展示、模擬店など、かなりの規模になることが予想されます。学内、学外問わず、参加した人が、「来てよかった」「やってよかった」といえるような大学祭にしていきたいと考えておりますので、よろしくお祈りします。

## 学 内 ニ ュ ー ス

### 平成6年度学士学位記授与式

平成6年度学士学位記授与式が、3月24日(金)10時30分から本学体育館で挙行されました。

式では、室内合奏団が奏でる調べのなか、学長より卒業生98名(うち女子25名)一人ひとりに学士学位記が手渡されました。

ついで学長から卒業にあたり式辞が述べられました。(学生課)

### 平成7年度入学式

平成7年度入学式が、4月7日(金)10時から本学体育館において挙行されました。

式では、新入生100名(うち女子学生33名)を代表して青木謙次郎さんが宣誓。

ついで学長式辞があり、新入生は医学生としての自覚を新たに大学生活の一步を踏み出しました。(学生課)

### 新入生研修実施される

平成7年度新入生研修が4月17日(月)・18日(火)の両日開催されました。

第1日目はA組、第2日目はB組を対象に実施されました。研修は新入生を12~13名のグループに分け、1グループに3名の若手教官が指導にあたり、自己紹介について学生生活全般にわたり助言並びに懇談が行われました。(学生課)

### 平成7年度の主な行事

今年度の主な行事は次のとおりです。

4月7日	入学式
4月17日~18日	新入生研修
6月2日~4日	医大祭
9月6日	体育大会
9月20日	解剖体慰霊式
11月5日	本学記念日
3月25日	学士学位記授与式

(学生課)

## 平成7年度運営組織

本学には、医学教育についての調査研究、教育課程の編成、修学指導、授業及び試験の実施、単位の修得及び履修、学籍関係等について審議する機関として教務委員会があります。

また、学生の厚生補導に関する調査研究、学生の課外活動、福利厚生等について審議する機関として厚生補導委員会があります。

両委員会の平成7年度の委員は次のとおりです。

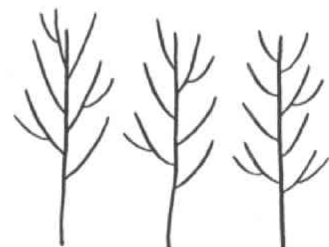
#### 〈教務委員会〉

委員長	東 匡 伸 (副学長)
副委員長	片 桐 一 (図書館長)
委員	谷 本 光 穂 (第1学年担当)
	上 口 勇次郎 (第2学年担当)
	藤 澤 仁 (第3学年担当)
	塩 野 寛 (第4学年担当)
	奥 野 晃 正 (第5学年担当)
	北 進 一 (第6学年担当)
	岡 田 雅 勝
	坂 本 尚 志
	菊 池 健次郎

#### 〈厚生補導委員会〉

委員長	東 匡 伸 (副学長)
副委員長	上 口 勇次郎
委員	立 野 裕 幸
	田 中 剛
	金 沢 徹
	山 村 晃太郎
	岩 元 純
	高 後 裕
	石 川 睦 男
	笹 嶋 唯 博
	酒 木 保

(学生課)



## 平成7年度大学院入学者名簿

学生氏名	専攻	研究指導教官
齋藤 裕司	細胞・器官系	石川 睦男
石崎 智章	細胞・器官系	米増 祐吉
生田 克哉	細胞・器官系	高後 裕
高橋 伸彦	細胞・器官系	高後 裕
本田 光則	細胞・器官系	高後 裕
石本 隆広	生体情報調節系	宮岸 勉
加藤 祐司	生体情報調節系	吉田 晃敏
籠川 浩幸	生体情報調節系	吉田 晃敏
柳谷 典彦	生体情報調節系	吉田 晃敏
岡田 瑞穂	生体情報調節系	牧野 勲
北野 陽平	生体情報調節系	牧野 勲
小村 景司	生体情報調節系	牧野 勲
清水 恵子	生体情報調節系	塩野 寛
荻野 武	生体防御機構系	片桐 一
アイノリー ビーター ゲサセ	細胞・器官系	小野 一幸
手立 志	細胞・器官系	石川 睦男
白躍 宏	生体情報調節系	竹光 義治
陳 敏	生体情報調節系	安孫子 保

## 平成6年度学位記受領者名簿

氏名	課程・論文の別	学位記授与年月日
濱田 修	論文博士	平成6年6月30日
小野寺 一彦	論文博士	平成6年6月30日
森田 一豊	論文博士	平成6年6月30日
藤内 智	論文博士	平成6年6月30日
西村 英夫	論文博士	平成6年6月30日
結城 正光	論文博士	平成6年6月30日
高木 章好	論文博士	平成6年6月30日
小林 吉史	論文博士	平成6年6月30日
梯 彰弘	論文博士	平成6年6月30日
松田 年	論文博士	平成6年6月30日
渡 二郎	論文博士	平成6年6月30日
長野 悦治	論文博士	平成6年9月30日
上垣 正彦	論文博士	平成6年9月30日
山本 明美	論文博士	平成6年9月30日

程 塚 明	論文博士	平成6年9月30日
中山 一雄	論文博士	平成6年9月30日
福井 実	論文博士	平成6年9月30日
竹光 正和	論文博士	平成6年12月22日
平野 史倫	論文博士	平成6年12月22日
高畑 治	論文博士	平成6年12月22日
玉川 進	論文博士	平成6年12月22日
長谷川 岳尚	論文博士	平成7年3月24日
木村 淳	論文博士	平成7年3月24日
中村 公英	論文博士	平成7年3月24日
堀田 和敏	論文博士	平成7年3月24日
杉澤 孝久	論文博士	平成7年3月24日
佐々木 正人	論文博士	平成7年3月24日
森川 満	論文博士	平成7年3月24日
山下 剛	論文博士	平成7年3月24日
石田 千佳子	論文博士	平成7年3月24日
武田 寛樹	論文博士	平成7年3月24日
角濱 孝行	課程博士	平成6年6月30日
丹野 誠志	課程博士	平成6年6月30日
中村 哲史	課程博士	平成6年6月30日
茗 荷秀昭	課程博士	平成6年9月30日
石崎 彰	課程博士	平成6年12月22日
西脇 邦彦	課程博士	平成7年3月24日
碁石 勝利	課程博士	平成7年3月24日
本間 裕	課程博士	平成7年3月24日
長嶋 雄一	課程博士	平成7年3月24日
横山 貴康	課程博士	平成7年3月24日
真鍋 公	課程博士	平成7年3月24日
小林 博也	課程博士	平成7年3月24日
古谷野 伸	課程博士	平成7年3月24日
川田 勝己	課程博士	平成7年3月24日
二木 源	課程博士	平成7年3月24日
鎌田 隼輔	課程博士	平成7年3月24日
アブナサール エサヌル ホーク	課程博士	平成7年3月24日



## 教官の異動

辞職	7.3.31	第二内科	講師	森川 秋月
◇	7.3.31	内科学第三	助教授	高杉 佑一
◇	7.3.31	小児科学	助教授	藤田 晃三
◇	7.3.31	第一外科	講師	前田 富典
◇	7.3.31	眼科	講師	田川 博
◇	7.3.31	産科婦人科	講師	斉藤 聡史
◇	7.4.30	麻酔科蘇生科	講師	玉川 進

昇任	7.4.1	薬理	助教授	橋爪 裕子
◇	7.4.1	病理二	助教授	木村 昭治
◇	7.4.1	衛生	講師	松井 利仁
◇	7.4.1	第二内科	講師	中村 公英
◇	7.4.1	内科学第三	講師	柴田 好
◇	7.4.1	第一外科	講師	稲葉 雅史
◇	7.4.1	産科婦人科	講師	佐々木公則
配置換	7.5.1	小児科学	講師	東 寛
停年	7.4.1	化学	教授	内田 倖喜

### 第37回東医体スキー部門男女アベック 総合優勝、東医体夏季、冬季総合優勝

平成7年3月19日～25日長野県菅平スキー場にて行なわれ、3年ぶりに優勝を果たし、北大のV3をはばみました。各競技の結果は以下の通りです。

#### 〈男子〉総合優勝

##### ◎スーパー大回転

2位	長 峰 正 泰	(6年)
3位	丹 代 晋	(6年)
5位	後 藤 孝	(5年)
6位	中 村 透	(6年)

##### ◎大 回 転

4位	丹 代 晋	(6年)
6位	斉 藤 学	(6年)

##### ◎回 転

1位	後 藤 孝	(5年)
5位	丹 代 晋	(6年)

##### ◎15kmXC

1位	有 倉 潤	(6年)
4位	福 永 亮 朗	(6年)

##### ◎8kmXC

1位	有 倉 潤	(6年)
4位	福 永 亮 朗	(6年)

##### ◎XCリレー

2位	有 倉、福 永 田 中、水 上
----	--------------------

#### 〈女子〉総合優勝

##### ◎大 回 転

4位 井 原 望 (5年)

##### ◎回 転

7位 井 原 望 (5年)

##### ◎5kmXC

1位	由 良 智 春	(5年)
2位	白 井 和歌子	(5年)
5位	皆 川 祐 子	(4年)

##### ◎3kmXC

1位	由 良 智 春	(5年)
2位	白 井 和歌子	(5年)
6位	皆 川 祐 子	(4年)

##### ◎XCリレー

1位 由 良、白 井、皆 川



### 東医体アイスホッケー成績

予選トーナメント	旭医大 v s 日 医	2 : 1
決勝リーグ第3位	旭医大 v s 筑 波	0 : 2
	旭医大 v s 順 天	3 : 1
	旭医大 v s 東 医	0 : 1

# 怒 外



廣 川 博 之

## 情 報

最近、連日のようにテレビでは「オウム真理教」関連の番組を放送している。国民的な関心事であるためか、あるいは高視聴率が期待できるためか、一日中、どこかのチャンネルで必ずといっていいくらいにやっている。新聞でもトップ記事のことが多い。テレビや新聞から得られた情報によって、真偽のほどは不明であるものの、「オウム真理教」と「オウム真理教とサリンとの関係」のことが茶の間にもよくわかったような気になってしまう。テレビを見ながら情報というものについて少し考えてみた。

現代は情報化社会などとよく言われるが、世の中には多くの情報がありすべてを把握することなど到底不可能である。勢い興味があって、自分にとり都合の良い情報だけを取り入れることになる。岩波書店の広辞苑によると、情報とは「①或ることがらに

ついでにのしらせ、②判断を下したり行動を起こしたりするために必要な知識」とある。ある事象の真実を掴むためには、これに関する「しらせ」や「知識」がかたよらず良質のものでなければならない。以前読んだ本に「情報とは情（なさけ）に報いること」とあった。長い時間をかけ、広い周囲と「情」のつながりをつくっておき、これに「報いる」形で返ってくるものが良質の情報である、ということである。

身近な医学に関して言うと、我々が新しい医学情報を得るためには、学会に出席し、医学雑誌などを読まなければならない。しかし、眼科についてだけでも学会は毎週のように国内のどこかで開催されており、眼科関連雑誌は国内のもので5、6誌、メジャーな海外雑誌を含めると10誌以上ある。当然すべての学会に出席し、すべての雑誌を読むなどということは不可能なので、取捨選択して情報を得ることになる。良質な取るものと悪質な捨てるものとを誤ると、後でとんだ赤恥をかくことになる。常々、広い視野で医学に接して「情」のつながりを密にしておき、「象とは壁のようなものだ」、が真実であると判断してしまうことのないよう心掛けたい。

私にテレビ局や新聞社と特別な「情」のつながりはないが、「オウム」、「サリン」に限らず報道機関の情報も良質なものであればよいと願っている。

（眼科学講座 講師）

## 編 集 後 記

広報誌編集委員会委員長 坂 本 尚 志

### 新コーナーの設置について

今回新たに「倶楽部今昔」と題して新たなコーナーを設けました。開学以来20年余り経ち、体育系、文科系クラブも幾多の変遷を経てきました。“生証人”のいる間という訳でもありませんが、この辺でクラブ活動の記録をまとめてもらう意味で始めました。クラブの歴史や過去の出来事、豪傑OBのことなど、あまり形式に囚われることなく紹介してもらいます。一号に四部づつのペースの予定です。

### 意見・提案の募集について

また、編集会議において、紙面の刷新のために、更に新たなコーナーを設けてはという意見がありました。投書欄や随筆コーナーなどのアイデアもありましたが、ここは広く読者の皆様の意見を聞こうと言うことになりました。そこで紙面の刷新のために皆様のアイデアを募集致したいと思います。どうか奮って、新しいコーナーについての提案や、これまでの内容についての意見をお寄せください。

投書先は玄関協の学内ポスト学生課まで。